



研究紹介

長崎大学高度感染症研究センターの研究や研究者を紹介するコーナーです。
今回はウイルス生態研究分野の好井健太郎教授です。

新型コロナウイルスに代表されるように、近年、世界各地で新興・再興感染症として人獣共通感染症（Zoonosis）の流行が発生しています。これらの流行は、人間の経済活動による地球環境の変化のため、病原体を保有する野生動物や、病原体を媒介する節足動物と人の接触の機会が飛躍的に増大したことが原因と考えられています。

私達の研究室では、このような人獣共通感染症の原因となるウイルスが、自然界においてどのように動物の中で維持され、人に感染して病気を引き起こしていくのか、というウイルスの生態に関する謎を解き明かし、ウイルスの流行の防止や治療法の開発につなげることを目的として研究を行っています。

私達は人獣共通感染症の原因ウイルスの中でも、ダニや蚊といった動物の血を吸う節足動物によって伝播されるウイルスを主な研究対象としています。このようなウイルスによる病気には、日本脳炎、ダニ媒介性脳炎、デング出血熱、重症熱性血小板症候群、クリミアコンゴ出血熱等、脳炎や出血熱といった重い症状を引き起こすものがあります。

これらのウイルスの感染・流行を防いでいくためには、ウイルスがどこに、どのような動物によって保有されているか、といった分布状況を把握し、感染者を正しく診断することが重要です。そのために私達は、国内および海外において野生動物や節足動物を対象としたフィールド調査を行い、ウイルスの保有状況を解析しています。また、これらウイルスの感染を診断するには、病原性の高い生きたウイルスを使用しなければならない事が多いのですが、施設・設



フィールドでの野生動物の調査現場の様子

BSL-4 Report から感染症ニュースへ

これまで地域連絡協議会での意見交換等の様子は「BSL-4 Report」でお伝えしてきましたが、高度感染症研究センター設置を契機にこれまでの地域連絡協議会のご報告に加え、センターで行われている研究の情報や感染症に関する身近な話題を紹介する地域広報誌「長崎大学高度感染症研究センター 感染症ニュース」として、内容を充実させてお届けすることにいたしました。